

方言地図の作成とその解釈 — 中国語言語地理学序説(続) —

岩 田 礼

キーワード： 言語記号の恣意性、民間語源、関係、類音牽引、文法化、同音衝突、同義衝突、地理的な相補分布、民俗、等語線、方言境界線、混交、音声変化、SEAL

1. はじめに

演習で方言地図の作成作業を進めている。大半は昨年度の方言学集中講義を受講した学生諸君だから、熱いうちに地図作りとそれに続く地図解釈を体験していただこうと考えたからである。しかし全国規模の地図作成のためには、データ収集、データ入力という根気の要る単純作業を経ねばならず、書物を対象とした演習に慣れた学生諸君には、とまどい、欲求不満があるかもしれない。そこで小稿では、現在行なっている作業にどのような意義があるかを述べてみたい。目的は、データをいかに処理し地図化するか、地図上の分布をいかに解釈するか、そして個別諸現象をいかに“一般化”(generalization)していくか、それらの手順とモノの考え方を示すことである。ただかなり専門的なテーマに話が及ぶことがあるのは予めお許し願いたい。同趣旨の論考として岩田(1995)があり¹、小稿は実質的にその続編である。

対象項目は身体語彙の“肘”と“肩”とする。対象地域は前稿同様、江蘇省東北部、行政的には連雲港市に属する約 50 キロ四方の農村地帯である。連雲港は中国のどこにでもある方言地域の一つにすぎない。小稿で紹介する諸現象も、

¹ より簡略な概説は岩田 1992a。

決して特殊なものではなく、中国の至る所で無数に生起している筈の一般現象である。

ただ、連雲港にはやや特殊な状況もある。それはこの地域が“官話”と呼ばれる方言群を南北に二分する長い境界線の東端にあり、全国方言の縮図とも呼ぶべき分布が見いだされることである(岩田 1992a 参照)。このことを理解していただくために、[参考地図]として三人称単数代名詞の分布を文末に付した(『漢語方言地図集(稿)第3集』,p.37)。主要語形は三種類であり、小さい四角が「他」、縦の楕円形は「渠」(*gjwo)、黒の縦棒は「伊」(*?i)を示す²。これを連雲港の地図 1,2,3 と比較すると、次のような平行性がみてとれる。

- 1) 南北対立を示す。
- 2) 北部の語形が西南部にも分布する。

連雲港では西部に北部、南部いずれとも異なる独自の語形が現れることがあり、これは西部方言の影響を物語る。また全国地図ではこれと異なる様々な分布パターンがある(岩田 2000)。それでも上記二点は、全国方言と連雲港地域方言に共通する分布の基軸である。

連雲港のデータは、主に蘇曉青氏(徐州師範大学)と私が共同の現地調査によって採集したものであり、ある話者のある場面での発話を対象としている(岩田 1998、岩田・蘇 1999 参照)。聞いたままを IPA(国際音声字母)で表記したもので(“印象表記”と呼ぶ)、二人がそろって調査した場合は意図的に録音もしなかった。同じ村でも別の話者なら異なった発話を得られるかもしれないし、同じ話者でも場面が異なれば異なった発話をするかもしれない。多分に一過的、パロール(parole)的な性格を有する資料だといえる。

これに対して、いま学生諸君が進めているのは、中国各地で行われた方言調査の記録(漢字と IPA で表記された語形)を一つずつ写し取っていく作業である。対象はすでに文字化されたデータであり、研究者のフィルターを通してパロール的な部分は除かれていることが多い。そのような操作の弊害は、言葉の変化を考える上で重要な手がかりが失われてしまうことである。しかし全国地図や

² *は理論的に再構成された中古音の発音。Norman 1988(p.214 など)による。

広い地域を対象とした地図(広域方言地図)では、連雲港のような狭い地域を対象とした地図(狭域方言地図)に反映されたパロールのな差異があまり意味をもたない。広域方言地図を作成する主要な目的の一つは、言語の歴史を深く遡ることであり、ごく最近発生した局所的な変化は考慮する必要がないからである。従って、漢字表記しかないような方言資料であっても、それを地図に書き込むことは意味がある。一方、パロールの要素を取り込んだ狭域方言地図は、文献言語史では到底得られない言語変化の実態を生きいきとみせてくれる。

方言地図作成ツールは、1998 年以来、福嶋秩子(県立新潟女子短期大学)・福嶋祐介(長岡技術科学大学)御夫妻の開発になる SEAL(System of Exhibition and Analysis of Linguistic data)を使用させていただいている。SEAL は 20 年来様々な改良がなされ、1998 年はちょうど Windows95 対応版が公開された年であった。また 2002 年には英語 Windows 上で動くバージョンが開発され、海外の研究者の中にも使用者が現れている(福嶋 2002)。英語版では中国の漢字フォント(GB, BIG5)が使える。SEAL は福嶋秩子氏のホームページ「言語地理学のへや」にアクセスしてダウンロードしていただきたい：

<http://www.nicol.ac.jp/~fukusia/inet/index.html>

SEAL 日本語版では GB、BIG5 などのフォントが使えないのが難点であったが、林智君(本学中文コース)の努力によって、Unicode ファイルから SEAL 用の DBS ファイルに変換するツールができた。関連ツール及び林君独自の地図作成ツールは、ホームページ「漢語方言地図の小部屋」からダウンロードできる：

<http://web.kanazawa-u.ac.jp/~chinese/fangyan/>

2. 語形の分類方法：“肘”を例に

語形は主に IPA で表示し、必要な場合に漢字(簡体字)表記を「」によって示す。語義は“ ”で提示する。1～5 の数字は声調を表す。0 は軽声。1～4 は北京語の 1 声から 4 声に対応し、5 は北京語では失われてしまった“入声”という声調を示す。

“肘”を表す語形のバリエーションは 35 種類みつかった。それらのすべてを

地図上に異なった記号で表わすのは意味がない。地図作成に当たっては、語形を観察し、一定の基準を定めてそれらを分類する作業が不可欠である。この作業には試行錯誤が必要だが、SEAL ではそれが“ハンコ設定”というメニュー上で地図を作りながらできる。

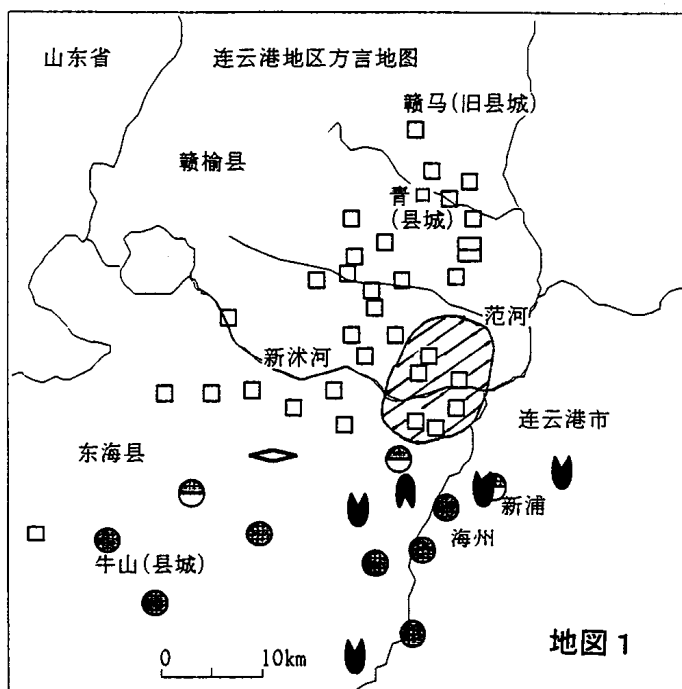
SEAL では彩色地図も作成できるが、現状ではそれを出版するのは困難である。白黒地図の場合、記号の種類を抑えないと読者は情報を読み取りにくい(目安は 10 種類)。“肘”や“肩”の場合も、語形全体に関するすべての情報を一枚の地図に盛り込むと情報過多になる。幸い SEAL は記号の種類が豊富で、線の太さや塗りつぶしの調整もできるので、使い方を工夫することで見やすい地図を作る。なおしばしば 1 地点で複数の語形が使われること(“併用”と呼ぶ)がある。小稿の各地図では記号の位置を若干ずらすことによって表現した(SEAL の補助機能の一つ)。

“肘”の場合、例えば[kəl pə0 kʰy1]と[kəl pə0 kʰy1 tsɿ0]の違いは接尾辞「子」の有無であり、分布上はあまり意味がない。ただ「子」の音声は、北京語と同形の[tsɿ0]の他に、[tɕə0]と[tɕɿ0]があり³、それらを地図 3 で線状の付加記号によって示した(“肩”の地図 6 も同様)。³ [tɕə0]と[tɕɿ0]は東南部にまとまって分布することがわかる。

「子」を除いた部分は、[kəl pə0 kʰy1]のように、三つの成分に分析できる(“肩”も同じ)。このような場合、成分ごとに 1 枚ずつ地図を作成するとシンプルな分布が浮かび上がることが多い。

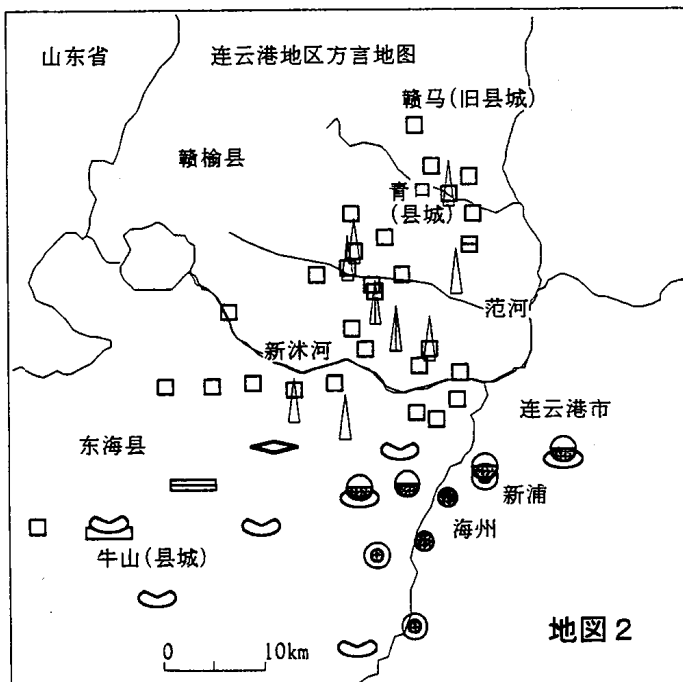
第一、第三成分については、それぞれ 1 枚ずつの地図を作成し、地図 1、地図 3 とした。地図 1 では、まず声調が 1 声か 5 声(入声)によって調査地域全体が二分されることがわかる。実質的に入声の有無を表わす音声地図になっている。ただ例外があり、横菱形記号([paŋ3 kə0 tɕəu3])の地点は入声を有する。また斜線によって示した狭い地域では、入声の一部又はその痕跡が認められる(下文第 3 章 4)を参照)。但し“肘”の第一成分は 1 声である。

³ [tsɿ]と[tɕɿ]は、漢語方言学の慣例ではそれぞれ[tsɿ]、[tɕɿ]と表記される音声。



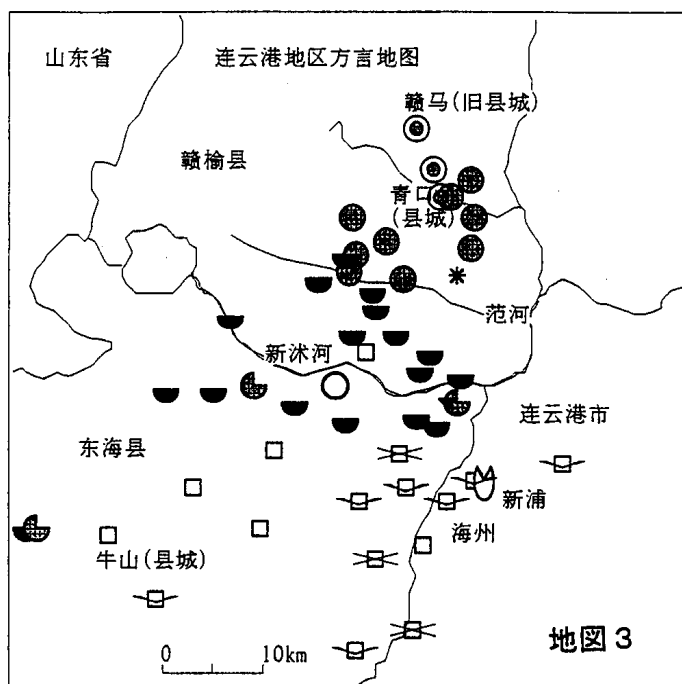
“肘”の第一成分

- [kə1]
- ▢ [kuər1]
- [kə5]
- ◐ [kə5]
- ◑ [kʰə5]
- ◒ [kʰə5]
- ◓ [paŋ3 kə0 tʂəu3]



“肘”の第一、第二成分

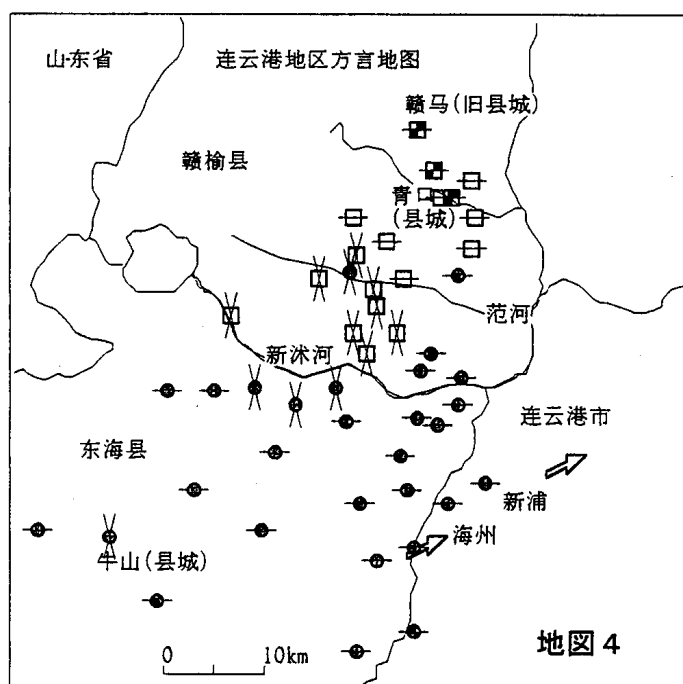
- [kə1 pə0] 「胳膊」
- ▢ [kuər1 pə0]
- ◑ [kə1 m̩0]
- ◒ [kə1 m̩ə0]
- ◓ {第二成分ゼロ「胳膊肘」
[kə5 tʂəu3], [kʰə5 tʂəu3]}
- ▤ [ka5 pa0]
- ▥ [kə5 pə0]
- ◓ [paŋ3 kə0 tʂəu3]
- ⊕ [kə5 paŋ0], [kʰə5 paŋ0] 「胳膊」
- ⊖ [kə5 paŋ1], [kʰə5 paŋ1] 「胳膊」
- [kə5 paŋ3] 「胳膊」



“肘”的第三成分

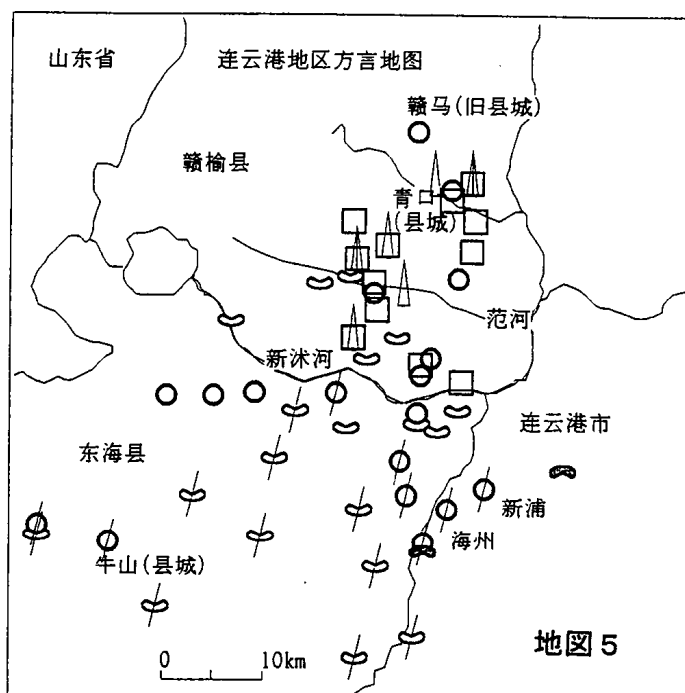
- [k^hy1] 「曲」
- ⊙ [tʃ^hy1] 「曲」
- [tɕ^hy1] 「曲」
- ◐ [tɕu2] 「轴」
- ◑ [tɕu1]
- * [tɕau1]
- ∨ [t^həu2] 「头」
- [tɕəu3] 「肘」
- ◒ [kuai3] 「拐」

- 接尾辞“子” : [tɕə0]
- 接尾辞“子” : [tɕɪ0]



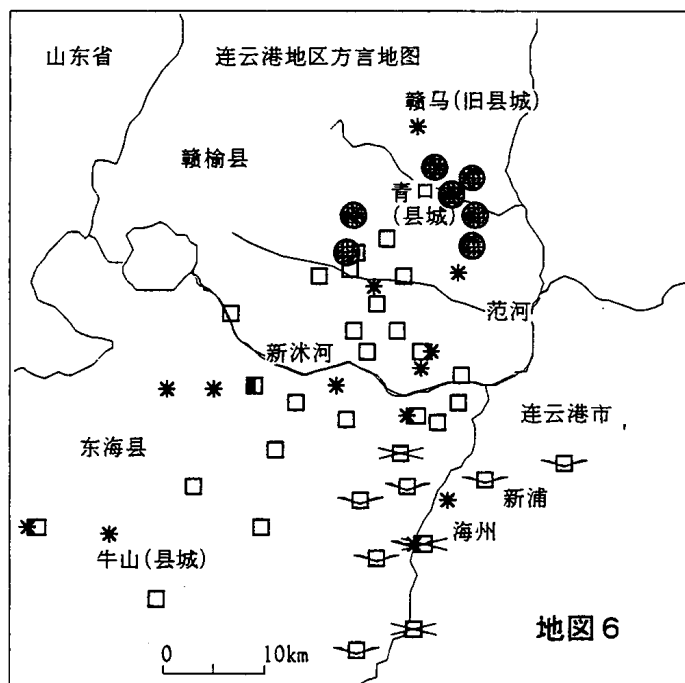
“肩”的第一成分

- 韻母
- [ien] [iē]
 - ⌵ [ian] [iæn]
- 声母
- [ki-]
 - [tʃi-]
 - [tɕi-]
- [tɕiŋ]



“肩”の第一、第二成分

- [kien1 paŋ3], [tɕiẽ1 paŋ3] 「肩膀」
- [kien1 pə0], [tɕien1 pə0]
- △ [kien mə0], [kiaen1 mə0]
- ▽ [kien m̩0], [kiaen1 m̩0]
- 第二成分ゼロ「肩拐」
- ∩ [kian1 kuai3], [tɕiaen1 kuai3] [tɕiẽ1 kuai3]
- ∪ [tɕiŋ1 kuai3]
- / 第一成分韻母の鼻音化 ien>iẽ(ian>iã)



“肩”の第三成分

- [kuai3] 「拐」
- [kuaɐ3] 「拐儿」
- [tʰəu2] 「头」
- 第三成分ゼロ「肩膀」
- * [kien1 paŋ3], [tɕiaen1 paŋ3]
-
- ∩ 接尾辞“子”:[tɕə0]
- ∪ 接尾辞“子”:[tɕɪ0]

地図 2 は主に第二成分を表現しているが、第一成分の声調情報も取り込んだ。
地図 2 の凡例に従って、“肘”を表わす全語形を示す(「子」の部分は除く)。

1. [kə1 pə0]系

1-1 [kə1 pə0 k^hy1] [kə1 pə0 t^hy1] [kə1 pə0 tɕ^hy1] [kə1 pə0 tɕu1] [kə1 pə0 tɕu2]
[kə1 pə0 t^həu2] [kə1 pə0 tɕou3]

1-2 [kuə1 pə0 k^hy1]

2. [kə1 m̩0]系

2-1 [kə1 m̩0 k^hy1] [kə1 m̩0 t^hy1] [kə1 m̩0 tɕu2] [kə1 m̩0 tɕou1]

2-2 [kə1 m̩0 tɕu2]

3. [kə5 pə0][ka5 pa0]系

[kə5 pə0 tɕou3] [ka5 pa0 tɕou3]

4. [kə5 tɕəu3] [k^hə5 tɕəu3]系 (第二成分ゼロ)

[kə5 tɕəu3] [kə5 tɕou3] [k^hə5 tɕəu3]

5. [paŋ3 kə0 tɕəu3]

6. [kə5 paŋ0][k^hə5 paŋ0]系

[kə5 paŋ0 tɕou3] [kə5 paŋ0 tɕəu3] [k^hə5 paŋ0 tɕəu3] [kə5 paŋ0 kuai3]

7. [kə5 paŋ1][k^hə5 paŋ1]系

[kə5 paŋ1 tɕəu3] [k^hə5 paŋ1 tɕəu3] [k^hə5 paŋ1 tɕəu3] [k^hə5 paŋ1 tɕu3]

8. [kə5 paŋ3]系

[kə5 paŋ3 tɕəu3]

第一成分と第三成分の関係をみると、両者は連動することがわかる。

- 1) 第一成分が 1 声なら、第三成分の声調は 1 声又は 2 声、かつ韻母が単母音の[y]又は[u]になることが多い。－上記の 1 と 2
- 2) 第一成分が 5 声(入声)なら、第三成分の声調は 3 声、かつ韻母は二重母音の[əu][ou]になることが多い⁴。－上記の 3～8

⁴ [əu]又は[ou]と表記した韻母は、海州あたりの東南部では[əu]の非円唇母音だが、北部や西部では韻母全体が若干円唇化するようである。しかし語彙調査ではこのような違いをしっかりと観察することができなかった。下文では一律に[əu]と表記する。

1)は北部・中部及び西南部に分布し、2)は南部に分布する。例外となる第三成分は下線で示したが、1)の例外は話者が標準語に汚染された形式を答えた可能性が高く、2)の例外は私が聞き取りを誤った可能性がある(後者は地図3で省略)。

なお“肩”を表す語形にも三つの成分に分析できるものが多い。[kien1 pə0 tʰəu], [kiæn1 pə0 kuai3], [kiæn1 mə0/mə0 kuai3], [tɕiɛ̃1 paŋ3 kuai3]等。但し南部には“肘”と平行的に(上記4.)、第二成分がゼロとなる語形も少なくない([tɕiɛ̃1 kuai3]等)。

“肘”と同じ基準によって語形を分類し、地図4-6とした。

3. 変化を生み出す諸要因

言語地理学が明らかにするのは、ヨーロッパや日本の方言にみられる現象が、中国語でもみられるという“普遍性”である。中国の方言がいくつあり、方言間にどのような差異がみられるかといった、分類(taxonomy)及びそれに伴う言語特徴の列挙は我々の仕事ではない。それは近年の文法研究が、品詞分類等の分類学的課題ではなく、普遍性の解明に力を注いでいるのと同じことである。普遍性の解明によって、各言語、各方言の個別性が明らかになることは言うまでもない。ある村の方言には、必ず他とは異なるなにがしかの個性があるが、そこに価値を見出し、それらの個性をフォローできるのは言語地理学だけである⁵。

言語地理学は歴史言語学の一研究方法である。従って“普遍性”とは、主に変化に関わる諸現象についてのそれを謂う。またそれは人間の言語的営みに関する一つの思想である。言語は“音韻法則”と称せられるメカニカルな要素によって変化する部分も確かに大きいが、同時に非法則的で一見無秩序な変化もまた無数に生起している。それは言語が人間の物質文化・精神文化と密接不可分な関係にあるためである。“トンボ”を「高粱」(甘肅省・敦煌方言)、「清明」(江西省・都昌方言、安徽省・繁昌方言)などと呼ぶのは、方言話者の気まぐれの所産には相違ないが、そのような気まぐれを生む必然性があつたはずで

⁵ グロータース 1994,p.59。

ある。それら個々の現象の成因と変化のプロセスを明らかにするのは個別的な作業であるが、それらの積み重ねによって言語・方言の違いを越えた変化の一般性が見えてくるはずである。

1) 民間語源

“馬”や“雨”の方言形は日本語でも中国語でも変種が少ないが⁶、“馬”を mā と呼び、“雨”を yǔ と呼ぶのに、理由はない。語形(言語形式)とそれが指すものの(又は意味)の間には必然的な関係がない(言語記号の恣意性)⁷。mā や yǔ のような語形を“無縁語”と呼ぶ。これに対して、“オタマジャクシ”や“トウモロコシ”の方言形は日本語でも中国語でも変種が多い⁸。これは語形とそれが指すものを関連付けようとする話者の意識が働き、それが語形の変化を生むからである。

地図 3(“肘”の第三成分)をご覧いただきたい。北部に分布する[kʰy1], [tʰy1], [tɕʰy1]は、いずれも「曲」である(以下では[kʰy1]で代表する)。語形全体では「胳膊曲」[kə1 pə0 kʰy1]となる。“肘”を“腕の曲がった部分”と表現することで、語形と対象物を関連付けようとしたのである。言語記号の恣意性を低めようとする話者による無意識の創造、これを“民間語源”と呼ぶ。

2) 二つの“関係”： syntagmatic / paradigmatic

連雲港地域では、坊さんがたたく“木魚”のことを、[m1 ly2], [mo1 ly2], [mu1 ly2], [mə5 ly2]などと呼ぶ⁹。これらはいずれも漢字で書けば「木魚」となる語の第二音節に、[l]の声母が付加されたものである。この[l]はどこから来たのか？由来は「禿驴」[tʰu1 ly2]([tʰuə5 ly2])であり、坊さんを嘲って呼んだこの語形(禿ロバ)への類推が働いて、“木魚”の語形に[l]が付加されたのである。変化は「木魚」と「禿驴」の関係において生じており、それによって語形と[坊さんがたた

⁶ “馬”と“雨”の日本語方言形は、『日本言語地図』201,253を参照。

⁷ ド・ソシュール『一般言語学講義』(岩波書店,1972),第1章及び第6章を参照。

⁸ 『日本言語地図』223,182を参照

⁹ もっとも現在は“木魚”というモノ自体を知らない人が多くなっており、名称を知らない人も多い。

くあの器具であるという]指すものとの関係が強化された訳である。このように、変化はしばしば他の語との関係において発生する。これを“paradigmatic な関係”と呼ぶ。

周知のように、中国語の外来語受容の基本は「电梯」式の意識であり、日本語のそれは「エレベーター」式の音訳である。外来語に限らず、現代日本では無縁語が氾濫しており、商品、社名などの命名においても恣意性の高い形式が好まれる。そこで、JT なら T がタバコの頭文字らしいとわかるが、UFJ などは、言語形式からそれが指すもの(銀行)を全く連想させないただのナンセンスワードである。ところが困ったことに、言語形式とそれが指すものとの関係が希薄になると、形式自体が不安定になることが多い。UFJ を USJ(テーマパーク)と言い違えてしまうのは、私の老化のせいだけでもなかろう。この場合、言い違いは UFJ と USJ の関係において発生している。

地図 1 には“肘”の第一成分が不安定であることを物語る例が、南と北に一つずつみられる。まず東南部では無気音声母が有気音([kʰə5],[kʰə5])になった。これは k>kʰの“音韻変化”が生じたためではない。[kə5],[kə5]という形式が有縁性に乏しく、第一成分に有気音を有する語形 - 例えば“ひざがしら”を表す[kʰə5(kʰə5)tʰəu2]「磕头」 - の牽引を受けやすかったからである¹⁰。

北部には[kə1]が[kuə1](r 化して[kuər1])となった地点があるが、これもə>uəの“音韻変化”が生じたのではない。真実は、おそらく“ひじ”の第一成分が“なべ”を表わす「鍋」[kuə1]に牽引されたのである。このような現象を“類音牽引”と呼ぶ。“ひじ”が“なべ”と関係するはずがないと疑う向きには、第一・第二成分全体で[kuər1 pə0]、つまり標準語の「锅巴 guoba」(おこげ)とほぼ同形となることに注意していただきたい(地図 2 参照)。この地点における“おこげ”の方言は [kuə1 tɕʰi0]だが、その第一成分はやはり「鍋」(なべ)であり、これらの[kuə1]が“ひじ”の[kə1]を牽引したのである。類音牽引は意味の類似を条件

¹⁰ もしこのような現象を k~kʰの“音韻交代”などと称し、古音再構に結びつける向きがあれば、それはとんでもない歴史の捏造となるだろう。

とせず、音の類似のみを契機として生起する話者による無意識の創造である¹¹。

地図 2 によって“肘”の第二成分を観察してみよう。北部で[pə]が多数を占める中で、[m]や[mə]がそれと重なるように分布している(併用が 6 地点でみられる)。[pə]が古く、それが[mə]や[m](子音だけの音節)に変化したと考えられるが、これはおそらく“腕”、“肩”などの関連語との関係において発生したものである。想定される変化の筋書きは次の通り¹²：

- (I) この地域では、かつて腕全体を[kə1 pə0]「胳膊」と呼んだ。
- (II) その後、南部から腕を表す[paŋ3 tsɿ0]「膀子」が北上したため、次第に[kə1 pə0]が何を指すのか理解されなくなった。本対象地域で「胳膊」が残存しているのは、最北の 1 地点のみ(音声形式は[kə1 pa0])。
- (III) [pə]は常に軽声で発音されるため元々音声的に不安定であったが、語源意識が薄らぐとさらに不安定となり、“肩”を表す[kiaen1 mə0/m0 kuai3]に牽引されて、[mə],[m]となった。但し[pə]>[mə],[m]の変化が起きても[pə]はそれで消え去ることはなかった。

“肩”の第二成分は地図 5 に示した。“肘”と同様に、第二成分が[m]や[mə]に変化した地点があり、やはり北部に分布する。しかし“肩”の場合は、第一成分が-n で終わる(又は韻母が鼻音化する)ため、[pə]の声母がその影響を受けて(“同化”と呼ぶ)、[m]になりやすいという事情がある([kiaen1 pə0 kuai3]>[kiaen1 mə0/m0 kuai3])。このように変化は語を構成する音声の横の関係によって生起することがあり、これを“syntagmatic な関係”と呼ぶ。

地図 2 と地図 5 を比較してみると、[m]や[mə]が現れる地点は、“肩”と“肘”で必ずしも一致しないことがわかる。これは新形式の[m],[mə]もまた不安定なため、調査の際にたまたま[m],[mə]が現れなかった地点もあるのだろう。

3) 文法化

言葉は人間の体と同じように、自己治癒能力を有する。これは 20 世紀初頭に言語地理学を打ち立てたフランスの言語学者達が強調した点である。連雲港の

¹¹ 駄洒落のメカニズムもこれに似るが、こちらは“意識的な創造”。

¹² これとは若干異なる筋書きも想定されるが、略す(岩田 1985, pp.170-175 参照)。

“肘”や“肩”の場合、それらの第二成分([pə],[m],[mə])は未だ不安定のままで、治癒の方法を見出していないようである。これに対して、軽声化によって第二音節の語源が忘れ去られ、不安定状態に陥った連雲港地域の「老鼠」(ネズミ)や「芦秫」(コウリャン)の場合は、第二音節を接尾辞の「子」([tʂə],[tʂɪ],[tsɪ])にすることで安定を得た。即ち、これらの語の第二成分「鼠」「秫」は、規則的には[su]又は[tʂʰu]であるが、軽声化によって音節全体が弱化し、[ʂə],[sə],[tʂʰə],[tʂʰɪ],[tʂə]等、同じ地点(同じ話者)でも複数の形式が観察されるのが常態である(特に中部諸地点で多い)。このような“病的な”不安定状態を治癒するために方言が取った方法は、これらを接尾辞にしてしまうこと、所謂“文法化”であった(主に南部諸地点でみられる)。かくしてネズミは「老子」に、またコウリャンは「芦子」になったのである(以上、地図省略。岩田 1992a,pp.42-43;岩田 1995,pp.48-52 参照)。

中国の研究者は語形を漢字で表記する時、語源で書いてしまうことが多い。上記ネズミの場合なら、音声がなんであっても「老鼠」。それで漢字だけに頼っていると変化のプロセスがみえなくなってしまう。漢字表記は地図作成の上で有用なことも多いが、本質的には語形表記の便宜的な手段にすぎないことを認識すべきである。逆に話者の共時的意識を尊重して「老子」と表記する資料があったとしたら、今度はその音声に注意して周辺地域で「老鼠」と表記される音声と比較する必要がある。

4) 同音衝突

地図3に示した諸語形も、語源を漢字で書いてしまうと - 凡例に挙げた最後の二つ(「頭」,「拐」)を除いて - すべて「肘」となる。それで済ませてしまつて、民間語源などによる語形変化のプロセスなど考えようもしないのが、中国方言学の現状なのだ。ここではさらに「胳膊曲」なる民間語源がなぜ生まれたのかを明らかにせねばならない。【以下、語形中の漢字表記「肘」と区別するために、意味は“ひじ”と表記する】

地図3に反映された状況を、比較言語学の観点から表現すれば、次のような“対応”がみられる、ということになる：

北部: k^hy1 / 中部: tɕu2 / 南部: tɕəu3

但し「肘」の漢字の発音(“字音”と呼ぶ)は、北部・中部でも3声の複母音形である:

北部: tɕiəu3 / 中部: tɕəu3 / 南部: tɕəu3

字音はいずれもメカニカルな音韻変化の結果を反映する“規則形”である。うち北部の[tɕiəu3]は中部・南部の[tɕəu3]より一段階古い形を示している¹³。これに対して、語形中にみられる1声又は2声の単母音形は、なんらかの原因によって規則的な変化を逃れた“不規則形”である。同様の現象が連雲港地域の北に位置する山東省でもみられる(語形の漢字表記は各依拠資料による)。

	「肘」の字音	“ひじ”の語形
博山	tɕəu3	胳膊肘[tɕy1]
沂水	zou3	胳膊举[tɕy3]子
平度	tɕou3	拐肘[tɕu0]头子
牟平	tɕiou3	拐肘[tɕu0]子

平行的な現象が広域的にみられることから、「肘」の単母音形は古い段階で発生したものと推定できる。即ち、山東から連雲港中部にかけての方言の祖先にあたる古方言で、おそらく*tɕiəu>tɕyの如き不規則変化が生起し、それが現代方言に受け継がれた。

このような不規則変化が生まれたのは、おそらく“豚のもも肉”(食品)が“ひじ”(人体の一部)と同音の[tɕiəu]であったためである。この二つの語は同じ漢字「肘」で表記されるが、“同字異語”である。“豚のもも肉”は我々の調査項目にはないが、北京では[tɕou3 tsi0](肘子)、また『普通話基礎方言基本語彙集』p.2973によれば¹⁴、連雲港及び山東の各地点、いずれも北京語形に対応する規則形である。語形全体でみると“ひじ”が“豚のもも肉”と混同されることは

¹³ 規則形[tɕiou3]と[tɕou3]の境界は、范河と呼ばれる小さな河の周辺であり、ちょうど[k^hy1]/[tɕu2]の境界とほぼ一致する。

¹⁴ 私のみるところ、同書は“普通話が方言地域にどの程度浸透したか”を示すものであるから、扱いに注意する必要がある。“豚のもも肉”については他に調査報告が少ないので、一つの目安として引用した。

ありえない。因って北京や連雲港南部では「肘」の不規則形が生じなかった。しかし“ひじ”が“腕に生えた豚のもも肉”「胳膊肘(子)」では具合が悪いと感じた人がいたとしても無理はない。例えば、山東省・新泰方言では、“豚のもも肉”が [tʃou3](規則形)であるのに対して、人体の“ひじ”は[pfu3](連雲港地域の[tʃy3]又は[tʃu3]に対応する不規則形)である。これはフランスの言語地理学者が好んで取り上げた“同音衝突”という現象の一種である。

中国語のもっとストレートな例を挙げれば、“to enter”を意味した「入」はもし平穩無事に変化を遂げたならば、現代北京方言で ri となる筈であった。しかしあいにくセックスに関わる同音の語と衝突したため、姿を変えて rù となった(李栄 1982)。Positive な又は neutral な語義の語と negative な語義の語が一つの形式をめぐって争えば、勝利するのは大抵 negative な方である。くだんのタブー語によって“to enter”が ri の位置を追われたように、“人体のひじ”と“豚のもも肉”の闘争においても、勝利を収めたのは後者であった。その結果、“ひじ”は規則形の[tʃiou3]の位置を追われて[tʃy]に逃げ込んだ。その[tʃy]が本対象地域北部で[kʰy1]に、また中部では[tʃu2]に変化したのである。では[tʃy]の声調は何であったか？この問題はかなり厄介で、模範解答を書くのは困難だが、以下一つの speculation として鄙見を述べる。

「肘」は 3 声を保った地点もあれば、1 声に変化した地点もある。このように声調の反映が一見不規則なのは、民間語源のためだけでなく、人体の“ひじ”の亡命先が当初[tʃy5]であったためではなかろうか。5 声(入声)がまだ山東省などでも広範に保たれていた時代のことであるが、それはそれほど昔のことではなく、現に地図 1 の斜線地域は北方系方言でありながら、なんらかの形でそれを保存している(岩田 1992b)。但し同じく入声でも連雲港南部地域のそれとは異なり、声母の清濁を条件に二つに分裂したその一方、つまり清入声であった。

北部で「曲」なる民間語源が生まれたのは、おそらくその北の方言の影響を受けたためである。本対象地域の外側になるので、地図 3 には反映していないが、贛榆県北部には「胳膊弯儿」[kə1 pə0 var1]が広く分布している¹⁵。そこで

¹⁵ 地図の北の外側、贛榆県・石橋、呉山、徐山等。岩田 1987 年及び岩田・蘇 1997 年の

次のように推定できる:調査地域ではかつて「胳膊肘[tʃy5]」が使われていたが、その北側に分布した「胳膊弯儿」の影響を受け、常用の形容詞「弯曲」への意味的連想が働いた結果、「胳膊曲[kʰy5]」が生まれた。[この解釈は太田斎氏(神戸市立外国語大学)の御指摘によるものである。太田氏に感謝申し上げる。]

この場合、*tʃiou3>tʃy5 のような中間段階を想定せずとも、「胳膊弯」の意味的な影響によって[tʃiou3]「肘」が直接[kʰy5]「曲」に変化したと考えた方がシンプルではある。しかし民間語源は、一定の音声的条件に支えられて生起することが多い。例えば、日本語のクスシユビ(薬師指)がクスリユビに変化したのは、意味を明確にするためであったが、変化は子音を一つ換えるだけですんだ。tʃy5>kʰy5 ならば声母を取り替えるだけですむが、[tʃiou3]と[kʰy5]では、声母、韻母、声調のいずれも異なるから、「弯曲」への意味的連想というだけでは、変化のための必要十分条件を満たさない。さらに中部の[tʃu2]は「胳膊弯」の影響では説明できない。

地図 3 で再度分布を確認してみよう。北部の[kʰy1]に隣接して、中部のかなり広い範囲に[tʃu2]が分布しており、さらに互いにかげ離れた 3 地点に[tʃu1]がある(もう一つの[tɕʰy1]については下記参照)。¹⁾ [tʃu2]はこの地域で「軸」と同音であるから、やはり【“肘は腕の軸”という】民間語源であろう。ではこの民間語源はどのように生じたのか?

音韻規則に従えば、当該地域において「肘」は*tʃy5>tʃu5>tʃu1 のように変化したはずである。声母のそり舌音化(tʃ>tɕ)に伴って韻母は y>u のように変化し、また 5 声(清入声)は多くの地点で 1 声(陰平)に合流した。この点は北部でも中部でも同じである。平行例(語彙調査で得られたものに限る)として、「叔」(“父の弟”を呼ぶ語幹)と「妯」(“兄弟の妻達”を示す「妯娌」の第一成分)があり、それぞれ*ʃy5>ʃu1、*tʃy5>tʃu1 と変化した。中部の 3 地点で[tʃu1]がみられるのは、規則変化の結果を反映する。ところが中部の多数地点では、規則通りにはならなかった。それはおそらく[tʃu1]の位置に「猪」(ブタ)がいたからである。

調査による。

「猪」と同音の語は他にもあり¹⁶、回避の傾向は一般にはそれほど強くないと思われる。しかし[tɕu5]が[tɕu1]に変化して「猪」と同音となった時、それと「胳膊」との結合が生み出す語のイメージは決して芳しくなかったはずである。中部の方言はそれを回避し、“ひじ”を表現するのにふさわしい「轴」(tɕy2>tɕu2)を見いだしたのであろう。

一方、北部では「猪」が一貫して[tɕy1]であったので、「肘」(tɕy5>tɕu5>tɕu1)との同音衝突は生じなかった。対象地域北部で[tɕy5]「肘」が[kʰy5]「曲」に変化したのは、[tɕu2]「轴」の誕生よりかなり前のことであった¹⁷。

5) 同義衝突

同音衝突は地理的な“相補分布”という形態によって回避されることがある。例えば、連雲港地域では同じ語形[kʰə tʰəu]が、北部では“土くれ”(標準語の「土块」)を、南部では“ひざがしら”をそれぞれ指し、分布が重なることはない(岩田 1995, pp.56-58; 62-64 参照)。同音衝突とは、一つの語形をめぐる二つの意味範疇の獲得競争であるが、この場合はそれが地理的な相補分布によって回避され、いわば休戦状態にある。

これに対して、一つの意味範疇をめぐる二つの語形が闘争するケースがあり、“同音衝突”に対する“同義衝突”と呼ぶことができる。例えば、大同市(山西省)東南部の農村地域では、“父の兄”(伯父)を呼ぶ語幹が西部と東部で異なっていた：

西部：「爹」 / 東部：「爷」

ところが西部の「爹」が東部に侵入した結果、境界線に近い村では、同じ意味範疇“父の兄”をめぐる「爹」と「爷」が争うこととなった。その結果勝利したのは、侵入してきた「爹」の方であったが、敗れた「爷」は“父の年上の従兄弟”という「使用頻度の低い意味領域に逃げ込んだ」(グロータース

¹⁶ 「猪」と同音の語には、姓の「朱」、「クモ」の「蜘蛛」(連雲港地域では「蛛蛛」又は「罗蛛蛛」)、“真珠”や“目玉”の「珍珠」「眼珠」などがあり、いずれも同音衝突を回避していない。但しこれらは言い古された無縁語である。

¹⁷ 広域的な地図によってはじめて明らかになることだが、実は「曲」が古く、「弯」はそれへの連想に生まれた、という逆の可能性もある。

1994,p.82)。また蘇州、上海などの方言では、“父”を呼ぶ語幹として「爹」と「爷」の二つを有するに至ったが、父を直接呼ぶ場合(vocative)は「爹」、父に言及する場合(designitive)は「爷」、というように用法の分担を図った。このように同義衝突を回避する最も普遍的な処方箋は、“意味の分担”、“用法の分担”(又は stylistic な分担)である。大量の外来語を受容した日本語において、和語と漢語そして欧米起源の外来語との間でこのような分担がみられることは周知の通りである。

いま同義衝突の観点から地図 3(ひじ)と地図 6(肩)を比較してみよう。まず地図 3 の[k^hy1]「曲」と地図 6 の[t^həu2]「头」は、いずれも范河以北又はその流域に分布している。次に地図 6 では[kuai3]「拐」の勢力が強く、一部はすでに范河を北側に越えているが、地図 3 の[k^hy1]「曲」とは、おおよそ補い合う分布が形成されている。

地図 3 “ひじ”

曲
轴、肘

地図 6 “肩”

头
拐

このような分布が形成されたのは、「曲」と「拐」が類義語であるためではなかろうか。「曲」は形容詞(“まがった”、反意語は「直」)、「拐」は動詞(“まがる”)であるが、語の一構成要素として使われる場合、そのような違いは意識されないはずである。北部で“肩”の[t^həu2]「头」が[kuai3]「拐」にとって代られ、“ひじ”[kə1 pə0 k^hy1]/“肩”[kien1 pə0 kuai3]のようになったとしても、語の弁別に差し支えはないのだが(実際にそのような地点が范河の北岸に4つほどある)、近接する身体部位を類義の異語によって表現することにある種の抵抗があったのであろう。

「曲」はかつて今よりもっと南まで分布していた可能性がある¹⁸。その一つの根拠は、地図 3 で「曲」が中部で 1 地点孤立的に分布することである(音声は[tɕʰy1]だが、北部の [kʰy1]に対応する)。そうだとすれば、「曲」の勢力縮小は“肩”を表わす「拐」の北上、勢力拡大(=「頭」の勢力縮小)と無縁であるまい。“ひじ”を表わす「曲」は、「拐」との同義衝突を避けながら勢力を狭め、現在では范河のラインまで後退した。

言語地理学的な同義衝突の例を私は他に知らない。例がおそらく少ないのは、語形全体の同義衝突の場合は“意味の分担”、“用法の分担”といった処方箋によって回避されるからで、ここで「曲」と「拐」の衝突が回避される傾向があるのは、語の一構成成分だったからではないか。地図 3 では南部の 1 地点において、「拐」[kuai3]が“ひじ”にも使われており、この地点(新浦)では、次のような体系が形成されている¹⁹。

“ひじ” [kəl paŋ0 kuai3] / “肩” [tɕiɛ1 paŋ3 kuai3]

ここでは語の弁別に関与するのが、主に第一成分であり、他の成分は非関与的である。このように関連意味範疇を表わす語形には、むしろ積極的に非関与部分(同音部分)が形成されやすい。まさしくその位置で類義語の[kʰy1]「曲」と[kuai3]「拐」が対立する体系【“ひじ” [kəl pə0 kʰy1] / “肩” [kiæn1 pə0 kuai3]】は、記憶の面で経済的とはいえない。これが地理的な相補分布を生んだ間接的要因であろう。

蛇足ながら、同音衝突と同義衝突は、文字学における假借及び転注とそれぞれ似たところがある。假借と転注はいずれも“同字異語”、即ち一字に複数の語が充てられる点で共通するが、その複数の語が假借の場合は同音語又は類音語、転注の場合は同義語又は類義語である(河野六郎 1994)。同一音声形式(例えば[tɕiou3])が異なる意味カテゴリー(例えば“ひじ”と“豚のもも肉”)を表わすに至ったのが同音衝突であり、同一意味範疇(例えば“父”)が異なる形式(例え

¹⁸ この推定は、「肘」*[tɕy5]>[tɕy1]>[tɕu1]が「猪」と同音衝突して「軸」[tɕu2]に変化したとする先の推定に抵触する所があるが、一つの可能性として指摘しておく。

¹⁹ 同じ体系が本対象地域の東の外側にみられる(連雲港市・墟溝など)。

ば蘇州、上海の「爹」と「爷」)を有するに至ったのが同義衝突である。連雲港の“ひじ”と“肩”の場合は、同一意味範疇でなく“関連意味範疇”だが、そこで「曲」「拐」という二つの類義語が衝突したのである。漢字発展史において、“同字異語”は加声、加點等の方法によって解消され、“一語一字”の原則が確立された(“ひじ”と“豚のもも肉”を同じ「肘」で表記するのはその例外)。同音衝突や同義衝突を回避する方法は一様ではないが、方言における“地理的な相補分布”はその一つである。

6) モノと言葉：民俗、民間信仰

上で人体の“ひじ”と“豚のもも肉”及び“豚”との同音衝突説を展開したが、これはいわば状況証拠から導き出した推論であって、いわば“物証”を欠くうらみがある。語史研究における物証といえ、一般に古文獻の記載が想起されようが、方言研究でより重要なのは広義の“民俗”、この場合なら“豚のもも肉”や“豚”が当該地域の人々の生活において、どのような役割を果たし、どのように捉えられているかを知ることである。身体語彙ですら思ってもみないモノが関連するのだから、動物、昆虫、植物などの方言については、なおさらのこと民俗に関する知識が欠かせない。

W.グロータース神父によれば、河北省・宣化地域では“ヤブキリ”(キリギリス科の虫)を「荞麦子」[tɕʰiao miaʔ zə](“そば”)と呼ぶ村があるという。これは“ヤブキリ”を表わした語形「叫蚊子」[tɕiao ma zə]が、この虫の鳴き声が麦の成熟を告げるという民間信仰によって「叫麦子」[tɕiao miaʔ zə]に変化し、蕎麦を栽培する村でさらに“そば”を表わす語形そのもので呼ぶようになったものである²⁰(グロータース 1994, pp.157-8)。

民間信仰や民俗にも地域差があることに注意せねばならない。ある地域出身の中国人に尋ねてなんらかの答えを得たとしても、それは他地域に当てはまるとは限らない。残念なことに、現在の中国方言学においては、モノと言葉の関係を探求する努力がほとんどなされていない。このような研究は本来、当該地域出身の中国人研究者しかなし得ないにもかかわらず、おそらく“学問の名に

²⁰ 類音牽引であろう。

値しない”との認識があるからであろう、方言研究者が“書物の魅力にとり憑かれて農村のことなど忘れてしまうという残念な現実”(グロータース 1994,p.35)がある。

ただ全く手がかりがないわけではない。例えば、各地の方言志が記録する諺語、歌謡の類。また今や死滅に瀕した民間信仰や民俗を記録にとどめようとする民俗学者の動きがあり、全国的な諺語集や地域ごとの研究書が現れている²¹。これらによって状況証拠を補強していきたい。仮に間違っている問題提起の意義はある。

4. 等語線付近での諸現象

一定の分布領域を有する二つの語形(ないしは言語的特徴)が隣接して分布する時、その境界線を“等語線”(isogloss)と呼ぶ。例えば地図 1 では、四角記号と丸記号(又は黒の足跡記号)の間に一本の線を引いてみればそれが等語線となる。ただ未調査の村があるから、現状ではあくまで“仮の等語線”である。正確な等語線は当該地域全村落の調査(しらみつぶし調査)を終えて初めて明らかになる。

等語線の位置は語によって異なり、完全に一致することは稀である。これは言語地理学が明らかにした経験則である。“ひじ”の地図 1-3 と“肩”の地図 4-6 では、等語線の位置が後者においてかなり北によっている(但し地図 5 の分布は錯綜している)。これとは逆に、地図 3,6 において、接尾辞「子」の音声 [tɕə], [tɕi] の領域は東南地域に限定されている。

一方、数多くの等語線がほぼ同じ位置に密集し、“等語線の束”を形成することがある。連雲港地域においては、地図 1-3 で想定される等語線及びその周辺を無数の等語線が通っている。“方言境界線”とは、このような等語線の束のことであって、決して一本の線ではない(グロータース 1994,p.51)。また線の幅は場所によって異なる。連雲港地域の場合、方言境界線は連雲港市西北端(贛榆県、東海県との行政境界線辺り)からいったん真西に向かい、地図 1 の菱形記

²¹ 連雲港地域では、劉兆元 1991 などがある。

号の辺りで向きを南西方向に変える。境界線の幅は東部で細く、南西に向かうにつれて太くなっていく。

等語線の現在の位置は、二つの勢力の一時的な均衡状態を反映するにすぎない。等語線付近は二つの勢力が日々“静かに”陣地の争奪戦を繰り広げる場であり、そこで様々な現象が生まれている。

(1) 語形の併用と意味・用法の分担

まず一つの典型は、一方が勝利を収め、他方の領域に侵入していくパターンである。“肩”を表わす語形で南部勢力が北上しつつあるのはその例。同様に“遊ぶ”を表わす語形では、南部の[uã2]([vã2])「玩」が北部の[ɕua3]「耍」を押しており、等語線はすでに新沭河を北に越えている。但し新沭河沿いの数地点では、[uã2]([vã2])と[ɕua3]の併用がみられる(地図略)。併用は一方が勢力を拡大し、他方がそれに抵抗する様を示している。その際、併用される二語形には意味や用法の分担がみられることが多い。「玩」と「耍」では、聞き手や話し手が大人か子供かで使い分けがあるようで、ある村の話者の報告によれば、より一般的なのは前者、後者は子供に対して使うことが多いという。

(2) 混交形

“遊ぶ”では新沭河の北側に新しい形式[ɕuan3]が誕生している。これは[ɕua3]を用いた話者が、[uã2]([vã2])の鼻音成分を取り込んだ結果である。一方“一人称代名詞”では、北部の[an]「俺」が南部の[o]「我」の領域に侵攻した。その結果、南部の中核地である海州・新浦などでは、[an]の鼻音成分を自らの[o]に取り込んで新形式[õ]が誕生した。いずれの例も音声的な“混交形”とみなすことができる(語彙的な混交の例は岩田 1995, pp.56-8 を参照)。侵入する側からみれば勢力拡大の一戦略、侵入される側からみれば抵抗と妥協の一手段である。

(3) 相補分布

同音衝突や同義衝突を回避するために形成された地理的な相補分布は、二勢力の平和共存状態を示す。

(4) 特異形

方言境界線付近では“思いがけない”語形が出現することが知られている。

それは二勢力による角逐の最前線において、エアスポットのような状況が出現することがあるためであろう。地図1の斜線地域に、他の北方方言では大方失われてしまった清入声が保存されたのも、ここが南部の入声全面保存地域と対峙する最前線だったことと無縁でなく、直接衝突を回避するためのいわば休戦地域といえよう。

ここで注目するのは、“ひじ”を表わす語形のうち、地図2で横棒及び横菱形記号で示した次の三語形である。いずれも方言境界線直近に分布する。

- ① [kə5 pə0 tɕəu3] ② [ka5 pa0 tɕəu3] ③ [paŋ3 kə0 tɕəu3]

これらは5声(入声)を有する地点にみられる上、第三成分はすべて[tɕəu3]なので、いずれも南部系語形とみなすことができる。但し①と②は、第一・第二成分に北部・西部の形式[kə1 pə0]の影響がみられ、一種の混交形といえる。うち②で第二成分の韻母が、北部の中舌母音[ə]とは異なり[a]であるのは、この語形がかつて*[kə5 paŋ0 tɕəu3](東南部の二地点に同じ語形が分布する)であり、[kə1 pə0]の影響によって第二成分の[ŋ]が脱落したためと推定される。その後、第一成分[kə]は第二成分[pa]に同化して[ka]に変化した²²。

③の[paŋ3 kə0 tɕəu3]は、[kə5 paŋ3 tɕəu3]の第一音節と第二音節が“ひっくり返った”形式である。このような現象を“metathesis”(語位転倒、音位転倒)と呼ぶが、それがこの地点でだけ生じたのはやはり方言境界線直近地点の特殊性であろう。元の形[kə5 paŋ3 tɕəu3]はおそらく南部諸語形の中で最も古い。その第二成分が弱化して[kə5 paŋ0 tɕəu3]となり、さらに第二成分が脱落して[kə5 tɕəu3]となったと推定される²³。地図2,3によって分布を確認してみよう。問題の横菱形記号は、南の[kə5 tɕəu3]と北の[kə1 pə0(m0) tɕu2]に囲まれて分布することがわかる。そこで次のような推定ができる：南北双方の語形の挟撃に遭った[kə5 paŋ3 tɕəu3]は、第二音節弱化又は脱落の危機に見舞われた。しかしこの

²² 南部では第一成分の母音が[v]で現れる地点があるが、この地点では音色がそれとは異なる[a]である。

²³ 南部のもう一つの形式[kə5 paŋ1 tɕəu3]は、おそらく[kə5 paŋ0 tɕəu3]から派生したもので、第二音節軽声の低平調が1声と類似していたため、re-categorize(再範疇化)されたのであろう。

[paŋ3]「膀」は、話者にとって“ひじ”が“腕”の一部であることを示す“なくてはならない成分”と感じられた。そこで南の第二成分脱落語形[kə5 tɕəu3]を受け入れると同時に、まさしくその[pəŋ3]を語の先頭に置いた。

5. 組織的音声変化の実態

音声は、なぜ、どのように変化するか？これは古くて新しい課題である。音声変化には、個別語彙において生起するものと、メカニカルな音韻変化規則によって組織的に生起するものがある。言語地理学が個別的な音声変化の解明に威力を発揮することは実証済みである。中国語方言の豊富な実例は、さらに組織的な音声変化についても新たな知見をもたらすであろう。ここでは“肩”の第一成分を示す地図4を例として、音声変化に関するいくつかの問題を考察する。

地図4では全地点が「肩」であるが、その音声に地域的な差異がみられる。まず東南部の2地点に分布する[tɕiŋ1]は不規則形であり、個別的变化の例である。[tɕiẽ1 kuai3]「肩拐」において、第一音節の韻母が第二音節の声母[k]の影響を受けた結果、前者の鼻音成分が[ŋ]になったのであろう²⁴。

「肩」では組織的な音声変化が、次のように四例みられる。分布地域を括弧内に示す。なお地図作成の都合により、(4)は地図5に表現した。

- (1) 声母の口蓋化： ki->tɕi- [北部の3地点(贛馬、青口及びその中間地点)]
- (2) 声母の口蓋化： ki->tɕi- [南部・中部²⁵]
- (3) 主母音の低舌化： ien>ian²⁶ [主に中部]
- (4) 鼻音韻尾の弱化(主母音の鼻音化)： ien>iẽ [南部]

うち(3)(4)は、変化が当該方言の音韻組織に変動をもたらさず、語の弁別にも

²⁴ 第一音節は正確には[tɕiɤ̃]であるから、鼻音成分が[ŋ]となり、それによって主母音が後舌化すれば、/tɕiɤ̃ŋ1/[tɕiŋ1]と認識されるはずである。

²⁵ このほか、范河流域の2地点で孤立的に[tɕi-]が現れたが、うち東側のそれは話者に問題があり(小学校の先生)、おそらく標準語の影響である。

²⁶ 印象表記の性質上、主母音は相対的な広狭を示すにすぎない。[ien]の主母音は[e]～[ɛ]の範囲、[ian]のそれは[ɛ]～[æ]～[a]の範囲の母音を含む。

影響を与えない。例えば、(4)の変化によって「肩」の発音が[tɕien1]から[tɕiē1]に変化しても、それで同音語が増えるわけではない。(3)も同様で、この変化が起きた地点では[ien]と対立する[ian]が存在しないので、変化によって同音語が増えるわけではない。但しこの場合は、南部方言の韻母に/ien/:/ian/の音韻的区別があることに留意する必要がある。例えば、北部・中部で同音の「肩」と「間」は、南部では前者が[tɕiē]、後者が[tɕiā]である。この区別は急速に消滅しつつあり、現在、等語線は方言境界線(地図 1,3 参照)よりかなり南にある(蘇曉青 1997,p.23)。しかしこの等語線が今からさほど遠くない過去において、現在よりもっと北にあったことは間違いない。南の隣接地域に/ien/と/ian/の区別を有する方言があったことが、中部における主母音の低舌化(e>a)に影響したと思われる。この問題は稿を改めて論じたい。

(1)と(2)の変化では、同調音部位の有気音、摩擦音も連動して口蓋化した：

(1) ki-, kʰi-, hi- > tɕi-, tɕʰi-, ɕi- (2) ki-, kʰi-, hi- > tɕi-, tɕʰi-, ɕi-

いずれも当該方言の音韻組織に変動をもたらすもので、このような変化を特に“音韻変化”と呼ぶ。(1)の[tɕ]は英語やフランス語で同表記される子音とは異なり、口蓋的である。(2)の[ɕ](標準語の x と相同)とは音色がやや異なるが、ここでは大体同じものと考えていただきたい²⁷。

まず前提は、[ki-,kʰi-,hi-]と表記した音声は、正確にはすでに口蓋化した[ci-,cʰi-,ɕi-]であり、東京下町の話者がヒとシを混同しやすいように、(1)(2)のような変化は音声的に極めて生起しやすいことである。但し(1)と(2)は互いに無関係に生起したもので、さらに変化の背景や様式も異なる。(1)は農村地域のローカルセンター(贛榆県の県城)において発生し、現在進行中の局所的な変化であり、今の所、周辺地域には拡散していない²⁸。おそらく小都市内部のなんらかの社会的要因によって発生し、内部的に拡散したものである(岩田 1983、蘇曉青 1985 参照)。これに対して、(2)の変化を促進した主要な要因は、村から村へ

²⁷ 范河北岸のある村では、[ɕ]の音色が英語のそれに近く、かつ後続する介母音-iが弱化している。これはそり舌音[s]への変化の中間段階を示す(岩田・蘇 2000,p.376)。

²⁸ 地図 3,4 において、青口では“肘”の第三成分及び“肩”第一成分が両形併用であることに注意。

の伝播であり、長い時間をかけてゆっくりと変化が進行してきたと考えられる。

(1)と(2)の口蓋化は、音韻変化の実質も異なる。まず(2)については、連動しもう一つの口蓋化が完了又は進行中である： $tsi-, ts^hi-, si- > t\check{c}i-, t\check{c}^hi-, \check{c}i-$ 。これを取り込んで(1)(2)を図式的に表わすと次のようになる(詳細は岩田・蘇 2000 参照)：

(1) $X > Y$ (2) $X > Z / Y > Z$

(1)は音 X が当該方言にすでに存在する音 Y に合流するタイプであり、北部3地点で多くの同音語を生んだ。例：

「江」 $kian1 > t\check{f}ian1$ = 「張」 $t\check{f}ian1$ 、 「稀」 $hi1 > \check{f}i1$ = 「湿」 $\check{f}i1$

(2)は音 X と音 Y がそれぞれ別個に変化を起こしながら、最終的には当該方言に存在しなかった音 Z に合流するタイプである。二つの口蓋化がいずれも完了した南部では、大量の同音語が生まれた²⁹。例えば、

「九」 $kiu3 > t\check{c}iu3$ = 「酒」 $tsiu3 > t\check{c}iu3$ 、 「稀」 $hi1 > \check{c}i1$ = 「西」 $si1 > \check{c}i1$

一方、中間地域たる新沭河流域(主にその南岸)の諸地点では、 $tsi- > t\check{c}i-$ の変化が $ki > t\check{c}i$ より遅れており(有気音、摩擦音も同じ)、同音語が生まれていない。例えば、「九」 $t\check{c}iu3$ / 「酒」 $tsiu3$ 。

これらの変化を二つの観点からみてみよう。

(i) 音 X から音 Y への変化(音価の変化)は、ゆっくり進行するか、それとも X から Y へ“突然”変化するか？換言すれば、音変化の中間段階を示す過渡的な音声は存在するか否か？

(ii) $X > Y$ 等の音変化規則は、当該方言で音 X を有したすべての語に同時に適用されるか、それともなんらかの中間的情况が存在するか否か？

(i)については、上記(1)、(2)いずれの場合も過渡的な音声が出現しないかのようである。しかしこれは前述のように、 $[ki-, k^hi-, hi-]$ が正確には $[ci-, c^hi-, \check{c}i-]$ であり、少なくとも(2)の場合は、 $[t\check{c}i-, t\check{c}^hi-, \check{c}-]$ との音声的距離が非常に小さいからである。新沭河流域で進行中のもう一つの口蓋化 $tsi-, ts^hi-, si- > t\check{c}i-, t\check{c}^hi-, \check{c}i-$ では、過渡的な音声 $[tsji-, ts^hji-, sji-]$ の存在が明らかである。

²⁹ 所謂“团音”と“尖音”の区別の消失。

(ii)に関して、音 X が【それを有したすべての語で】一瞬にして Y ないし Z に変化することはないといってよい。中間的情況には二つのものがある。一つは、いわば音声的な“併用”であり、多くの語が X, Y のいずれにも発音される場合(X~Y)。北部 3 地点で生起した(1)の変化では、このような中間段階を示す層が同一方言内部に存在する(蘇曉青 1985 で“動揺派”と称せられる層)。例：「金」[kin1]~[tɕin1]。もう一つは、ある語群では X、別の語群では Y で発音される場合。南部・中部で生起した(2)の変化では、語によって等語線が少しずつずれる(但し“すべての語”を観察するのはもとより不可能である)。例えば、「肩」は ki-だが、「舅」(*ki-)は tɕi-となる地点がある。

これらの問題については、すでに長い議論の歴史がある。19 世紀に“音韻変化に例外なし”と唱えた西欧の比較言語学者(Neo-grammarians)の考えでは、音変化の規則(音韻法則)は、音 X を有したすべての語に同時に適用され、X は中間で過渡的音声(X', Y'...)を生みながら、“のこぎりで木を切るように”ゆっくりと変化し、Y となる。言語地理学はこの説を基本的に受け入れながら、変化に関する等語線が語によって異なることを明らかにした。即ち、X>Y がすべての語で完了済みの地域、すべての語で未発生の地域がある一方で、中間地域の村々では X が Y に変化した語、X のままの語、及び過渡的音声(X', Y')の語がみられ、村によって情況が異なる。

1970 年代に至って、新しい説が中国語方言を主な素材として、北米に誕生した。William S-Y. Wang(王士元)教授が主導した“語彙拡散”(Lexical diffusion)理論であり、上記(i)(ii)はこの理論の問題提起である。それによれば、音声変化は、(i)音声的には一気に進み(phonetically abrupt)、(ii)語彙的にはゆっくり進行する(lexically gradual)。Neo-grammarians とは全く逆の見方である。(ii)は言語地理学の考えと似る所があり、ある方言において、変化はまず一定数の語において開始され、次に多数の語を襲い、変化を免れた少数の語が残余形(residue)として最後に残る、という(Wang ed.1977, 王 1983 参照)。

小稿の限られた資料で学説史上の大問題を言い尽くすのは土台無理だが、いくつかの問題を指摘しておきたい。

1) 音声変化の語彙的反映について

なんらかの中間段階を想定する言語地理学や語彙拡散理論の主張は基本的に正しいと思われる。しかし“音声変化の進度が語によって異なる”というのは、実は疑わしい所がある。上述のように、言語地理学の調査は、“ある話者のある場面での発話”を対象としている。従って「肩」が ki-、「舅」が tɕi-だというのは、その場限りの事実かもしれず、その村における普遍的真実である保障はないのである。もう一つの真実はおそらく、変化の中間段階において、当該語すべてが X、Y のいずれにも発音されうることである。調査の際にたまたまそのいずれかが観察され、さらにそれが文字化されれば、“音声変化の進度が語によって異なる”ことになるが、それは事実の一部でしかない。語彙拡散理論にも同じ問題があるが(下記参照)、中間段階として旧音 X と新音 Y の併用(X~Y)が想定されるのは正しい。もしある語が X 又は Y のいずれにしか発音されないのなら、そこには個別事情又は特殊状況があるとみた方がよい。それを明らかにするのは、言語地理学、社会言語学である。

2) 音価の変化について

突然変化も確かに存在するが(強弱アクセントの変化など)、上記のように変化の中間段階で過渡的な音声が見れることも多いはずである³⁰。語彙拡散理論ではあまり注意が払われていないようだが、ある変化が当該音韻体系にもたらす影響を考慮し、変化のタイプを区別する必要がある。例えば、音韻変化では X>Y 式の“合流”が多いが、声調調値の変化などでは合流が起きることが却って少ない。また上記(1)(2)の口蓋化は、変化の結果がいずれも“合流”であるが、(1)では[ki-]が当該方言音声にすでに存在する[tɕi-]に変化するのに対して、(2)の ki->tɕi-及びもう一つの口蓋化 tsi->tɕi-では、変化の終点が当該方言に存在しない音声[tɕi]である。このような変化のタイプの違いは音価変化の様式を規定するであろう。

3) 語彙拡散理論について

この理論が説明するのは、人類史上無数に生起してきた音声変化のおそらく

³⁰ 音価の段階的变化の実例として、徐通鏘 1991, 第 13 章 (pp.293-325) 参照。

一部にとどまる。最大の問題は、この理論の素材となった北京大学『漢語方言字彙』(文字改革出版社,1962)所掲 17 地点のほとんどが大都市だったことである。そこに反映された“音声変化”の多くは、おそらく社会言語学的要因によってもたらされたものであり、いわば“都市型”の変化である(上記(1)、北部 3 地点で起きた口蓋化はこの類)。農村の自然方言においては、音声変化を促す主要因が、村から村への変化の拡散であるが、語彙拡散説は中国の農村方言を全く視野に入れていない。また『漢語方言字彙』は字音資料であるから、“語”を単位とした音声変化はそもそも観察し得ない。さらにこのような文字化された資料では、変化の過程を物語るパロール的な変種が捨象されることが多く、変化の実態を正確に捉えることができない。

日本で伝統的な農村方言が多く消滅してしまったように、中国の農村方言も今や急速に勢力を弱めつつある(岩田 2002, pp.119-20)。この“生きた言語の実験室”(グロータース 1994, p.158)が消滅しないうちに、音声変化の実態に関する詳細な調査を農村地域で実施すべきである。

6. まとめ：語史の再構

以上の考察によれば、“ひじ”、“肩”はかつて次のような形式であったと推定される。

	“ひじ”	“肩”
北部・中部	胳膊肘[kə5 pə0 tʃy5]	肩膀头[kien1 paŋ3 tʰəu2]
南部	胳膊肘[kə5 paŋ3 tʃəu3]	肩膀拐[tɕien1 paŋ3 kuai3]

これらが同時代に共存していた保障はない。南部での「肩」の声母の口蓋化、北部・中部での 5 声(清入声)の非入声化等、各種変化の相対的年代を決めるのが難しいからである。なお“肩”のより古い語形は「肩膀」で、「头」「拐」はその後添加されたもの。その後の変化は次のように再構成できる。

(a) 北部・中部では「肘」が tʃy5>tʃu5>tʃu1 のように変化するはずであった。しかし北部では比較的早い段階で、民間語源による tʃy5>kʰy5「曲」の変化が生じた。中部では tʃu5>tʃu1 の段階で、「猪」(tʃy1>tʃu1)との同音衝突が生じたため、

それを回避すべく新しい民間語源「軸」[tɕu2]が生まれた。

(b) 第二成分は弱化、脱落に向かった。但し“ひじ”では北部・中部で脱落が生じなかった。それは“腕”を[kə1 pə0](胳膊)と呼んだことに支えられていたが、南部から「膀」が北上して「胳膊」にとって代わった後は、[pə0]の音声が不安定となり、変異形[mə], [m]が現れた。“肩”では北部・中部の第二成分“膀”が、paŋ3>paŋ0> pə0のように弱化した。これは“ひじ”の[pə0]に対する類推が働いたためである。一方、南部では paŋ3>paŋ0>ゼロの変化が“ひじ”と“肩”で平行的に進行した³¹。

[参考文献]

1. 一般論著

福嶋秩子 2002 「方言地図作成の機械化」 馬瀬良雄監修、佐藤亮一・小林隆・大西拓一郎編集『方言地理学の課題』, 明治書院, pp.418-431.

岩田礼 1983 「贛榆・青口方言声母近幾十年的語音変化」 『中国語学』 230, pp.145-150.

----- 1985 「身体語彙の体系と語形変化…中国・江蘇省東北部地域に於ける言語地理学の試み(Ⅱ)…」 『アジア・アフリカ言語文化研究』 30, pp.62-176.

----- 1992a 「中国語方言の地理学的研究」 『しにか』(大修館), 1992年, No.4, pp.37-43.

----- 1992b 「贛榆・羅陽郷方言的入声—兼論贛榆方言入声的歴時演變」 『中国語学』 239, pp.164-171.

----- 1995 「漢語方言史の不連続性——中国語言語地理学序説」 静岡大

³¹ 南部では“ひじ”“肩”のいずれにも[pə0]のような弱化形式が現れない(境界線直近の[pə0]は除く)ことから、paŋ0>ゼロの直接変化を想定すべきである。

学『人

文論集』45-2, pp.43-77.

----- 1998 「方言をフィールドワークする：中国における方言調査の実例」 『しにか』, 1998 年, No.5, pp.55-61.

----- 2000 「現代漢語方言の地理的分布とその通時的形成」 『中国における言語地理と人文・自然地理(7): 言語類型地理論シンポジウム論文集』, 平成 9-11 年度科学研究費基盤研究(A)研究成果報告書(代表者：遠藤光暁), pp.5-49.

----- 2002 「中国の方言地理学」 『方言地理学の課題』, 明治書院, pp.117-126.

岩田礼・蘇曉青 1999 「江蘇省連雲港地区方言の言語地理学研究概要」 『漢語現状与歴史的研究』(中国社会科学出版社), pp.243-259.

-----2000 「江蘇東北部方言の語音変化」 『漢語音韻学第六屆國際學術研討會論文集』, 香港・文化教育出版社, pp.372-380.

河野六郎 1994 『文字論』, 三省堂.

劉兆元 1991 『海州民俗志』, 江蘇文芸出版社.

馬瀬良雄 1992 『言語地理学研究』, 桜楓社.

李栄 1982 「論“入”字的音」 『方言』1982-4, pp.241-244, 『語文論衡』(北京・商務印書館, 1985)再収.

Norman, Jerry 1988 *Chinese*. Cambridge University Press.

柴田武 1969 『言語地理学の方法』, 筑摩書房.

蘇曉青・吳繼光・王珏、耿超英 1985 「贛榆(青口)方言見組細音声母變化的探討」 『徐州師範学院学報(哲社)』, 1985 年 4 期, pp.1-7.

徐通鏘 1991 『歷史語言学』, 北京・商務印書館.

Wang, William, S-Y(王士元) ed. 1977 *The Lexicon in Phonological Change*. Mouton.

-----1983 「語言的演變」 『語言学論叢』第 11 輯, pp.115-129.

2. 翻訳書

ドーザ(Albert Dauzat)著、松原秀治・横山紀伊子訳 1958 『フランス言語地理学』, 大学書林.

グロータース(Willem.A.Grootaers)著、岩田礼・橋爪正子訳 1994 『中国の方言地理学のために』, 好文出版.

ド・ソシュール(Ferdinand de Saussure)著、小林英夫訳 1972 『一般言語学講義』, 岩波書店.

3. 地図集

『漢語方言地図集(稿)第3集』1999 平成9-11年度科学研究費基盤研究(A)“中国における言語地理と人文地理”(代表者:遠藤光暁)研究成果報告書(5).

『日本言語地図 第1集～第6集』1966-1974 国立国語研究所.

4. 方言調査報告

陳章太・李行健(主編)1996 『普通話基礎方言基本語彙集』, 語文出版社.

高慎貴 1996 『新泰方言志』, 語文出版社.

羅福騰 1992 『牟平方言志』, 語文出版社.

錢曾怡 1993 『博山方言研究』, 社会科学文献出版社.

蘇曉青 1997 『東海方言研究』, 新疆大学出版社.

于克仁 1992 『平度方言志』, 語文出版社.

張廷興 1999 『沂水方言志』, 語文出版社.